

# 美術科向け「スタディ・スキルズ」の実践報告と考察

教育人間科学部 佐藤 哲夫

## The practice report and consideration of "Study skills" for the Major in Plastic Art

SATO Tetsuo (Faculty of Education and Human Science)

The maximum important matter of the "Study Skills" for the major in plastic art is communication and mutual understanding of a teacher and every attendance student.

For that purpose, I experimentally performed the lesson which uses the photograph.

It is lesson of students finding various intramural interesting things, taking a photograph with a digital camera, and talking together about those photographs.

Keywords : Study Skills, communication, mutual understanding, experience

### 1 はじめに

「スタディ・スキルズ」は、大学での学び方を教えるために設定された科目である。学びの技術・技法としては、資料・文献の探し方、ノートテイキング、PC利用法、対教員や学生間におけるコミュニケーション技法、プレゼンテーション技法、レポートの書き方、道具、機器の安全な使用法などが一般に挙げられる。また、学び方ではないが、大学での学びを円滑にするために、大学のカリキュラムや開講科目の概要の理解を図ることもよく行われる。しかし、「スタディ・スキルズ」が始まってまだ数年しか経ておらず、また、課程・教科など、領域によって必要な学びのためのスキルは異なる部分があることから、当該のそれぞれの「スタディ・スキルズ」において、独自の試みがなされていると思われる。美術科においても、試行錯誤しながらいろいろと模索している段階であり、未だこれによしとする形態・内容には至っていない。したがって、この実践報告も模索途中の報告でしかない。しかし、まだ導入間もない「スタディ・スキルズ」に関する報告ということで、他の「スタディ・スキルズ」の内容構築の参考になるかもしれないと考え報告することとした。

### 2 美術科向け「スタディ・スキルズ」の経緯

美術科向け「スタディ・スキルズ」は、形態と内容に関して模索が続いている状況であるが、担当者に関してはずっと変わることなく、美術科の全教員で担当してきた。これは、暗黙のうちに公平の原則が適用されているためであるが、さらに、美術科の特性のためでもある。美術科は、大きく分野として実技と理論に

分かれる。美術史など理論系の分野は、資料の探し方やレポートの書き方などのスキルが必要であるが、絵画や彫刻などの制作においては、実技に関わるスキルや、安全教育が必要である。そして中身にも違いがある。したがって、誰か一人が担当するわけには行かないのである。美術科では、これまでは全教員が、数回ずつ受け持つというオムニバス形式で実施してきた。このやり方のよい点は、2年次以降に比べて接触機会の少ない新入生と、すべての教員が接し会える点である。これは重要なことである。またオムニバス形式だと、教員一人一人の負担が少なくなるというメリットもある。しかしながら、一教員は、2～3回の授業を行うだけなので、授業の効果があるのかないのかははっきり掴めない。また、各教員の授業の中身に関しては、お互いに十分な把握が難しいので、無用な重複や、その逆に思わぬ欠落がある可能性もある。そして、新入生と接するという点に関しても、オムニバス形式だと一般的な知識伝達型の講義になり勝ちで、新入生全体の印象は掴めるが、一人一人の特徴や存在については、ほとんど把握できないという欠点が見えてきた。筆者個人の判断では、総体として、平成15年度までの「スタディ・スキルズ」の意義と有効性は、かなり限定的なものに止まっていたと思われる。

このような反省から、美術科では平成16年度の「スタディ・スキルズ」は、受講生を少人数のグループに分けて行うやり方を試行してみることになった。教員の側から見ると、以前は全員を相手に数回の講義をするという形態から、少人数のグループを相手にゼミ形式の授業を持ち、それをすべてのグループに繰り返す形になる。受講生の側から見れば、グループで一緒に、

毎回順番に異なる教員の研究室で授業を受けていくという形になる。「スタディ・スキルズN」(Nは美術科向け)のシラバスを転載しておく。

## 「スタディ・スキルズ N」

### 科目の概要と目標

美術教育と美術やデザインを核に、広く今後大学で学んでいくための学習法や、心構え、基礎知識などを学ぶ。授業形式は、〈授業計画〉にあるように、少人数の対話形式で行う。そして美術の全ての教員と近いところで接し話し合うことで、多角的に大学での学習の動機付けを得て、学習法のポイントが身につくように図る。

また教員は、これによって個々の新入生への理解を持ち、以後の教育や指導の手立てとする。

### 達成目標

- 大学での学習に対する期待と意欲を持つ。
- 大学での学習内容やカリキュラムの大まかな像を得る。
- 大学における学習法を理解する。
- 会話を通して各教員の人となりを理解し、自分について知ってもらおうとする。

### 授業計画

1. 1回目全員に対してオリエンテーション。
  - 担当教員の紹介。
  - この授業の目的と進め方の説明。
  - 班分け。(学生を5班(1班は約5名)にわけろ。)
2. それぞれのグループは以後、14週に渡って、順番に毎週別の研究室で授業を受ける。
  - 2回目1班(佐藤)2班(丹治)3班(近藤)4班(橋本)5班(山本)
  - 3回目1班(山本)2班(佐藤)3班(丹治)4班(近藤)5班(橋本)(以下15回目まで略)

### 受講に当たっての留意事項

- 気後れせずに、積極的に発言質問すること。

### 成績評価

- 最終的な成績の評価は、担当教員の評価の平均点で行う。
- 評価は出席を重視し、授業への取組み、レポートなども総合的に勘案して行う。

このように、新しい「スタディ・スキルズ」では、新入生である受講生と教員が、顔を合わせて話し合いながら学習法やカリキュラムについて学ぶのであるが、最も強調されることは教員と受講生一人一人のコミュ

ニケーションと人間理解ということである。こうしたことは、狭い意味での大学学習法からはあるいは外れているのかもしれない。しかし、学生が大学で学んでいくために何が必要かと考えた場合、経験からいえることは、学生と教員の間の相互作用(働きかけ)を保障する基盤としてのコミュニケーション回路があるかないかということなのである。そして、それは、自由な会話の体験とそれを通して獲得された相手の像によって形成されると考えられるのである。

## 3 平成16年度「スタディ・スキルズN」の実践

上記のようなやり方で、筆者の場合だと平成16年度は8回の授業を行なった。1グループ約5名で5グループあるので、8回ということは、2つのグループは1回だけ担当し、残りの3グループは2回の授業を行なったということである。この不均一は望ましくはないが止むを得ない。ここでは、他の教員の実践は報告できないので、筆者の実施した授業の報告をおこなう。

一巡目の授業では、まず一人一人に自己紹介してもらうことから始めた。名前、出身だけでなく、なぜ新潟大学の美術を選んだか、高校時代はどんなことに打ち込んでいたか、どんな事に興味があるか、大学では何をしたいかなども話してもらう。人によって違いはあるが、大抵の学生はニコニコと笑顔でいろいろ話してくれる。コミュニケーションの基本は、ちゃんとできていると思えた。しかし自己紹介のようなことで、これがクラス全員が集まった教室で行うとなると難しくなりストレスが過剰になる。自分のことを相手に伝えるという目的よりも、義務として押し付けられた課題を何とか無事にやり過ごすことに気が向いてしまう者が多くなる。このような体験は、お互いのコミュニケーションを活発にしようという気持ちに抑制的に働いてしまう。筆者の研究室には、少人数のゼミ用に、直径180cmの丸テーブルがある。5~6人が輪になって座ると、自然と上下関係の力が緩和され、メンバー同士が心理的に等距離になり、ここにいるみんなが仲間であるという感じが生まれる。このような、人数の大きさや、どのような形で座るかなどは、コミュニケーションを心地よいものにするために、かなり大きな役割を果たしている。

しかし、この自己紹介とそれに関連した会話ということにも落とし穴があった。最初のころのグループは、生き生きして熱心であったが、後のグループに行くにつれてだんだん乗り気でなくなっていった。その訳は、どの教員の授業でも大体最初は、自己紹介が求められ、受講生は、話すことも、また他の人の話を聞くことにも新しい内容が減ってきて、繰り返しや焼き直しになるためである。したがって、自己紹介は、後ろのグループに行くに従って、まだ話されていない、一般的でない事項について尋ね、答えてもらうようにするほ

うがよい。

自己紹介関連の話の後の時間は、ビデオやデジタルカメラなどで記録した手持ちの映像を小型のプロジェクターでホワイトボードに投影して見せながら、話をしたり、感想を聞いたり、質問を受けたりする時間とした。見せた映像は、隔年で過去2回ほど行われた『うちのDEアート』（アートによる地域活性化を目的に、新潟市内野地区で実施された、美術科によるアート・イベント）や、これまでいろいろ実施してきた子どものための造形ワークショップの活動の記録である。こうした映像を見せながら、それぞれの実践活動の意図や狙いを説明したり、どのような苦労や成果、喜びがあったかなどを話す。また、美術教育において、今どうということが問題になっていて、なにが必要と思われるのかなのかなどを易しく話し、大学での美術教育のカリキュラムの基にある考えを伝える。しかし、一番の目的はそうしたことの知的な理解ではなく、先輩の学生が子どもを相手に活躍し、子どもたちが生き生きと活動しながら個性的な表現を生み出していく映像を見ながら、そこから刺激や感動を得て、「面白そう。楽しそう。自分もやってみたい。子どもたちに働きかけてみたい。」という気持ちを持ってもらうことにあるのである。それには、やはり映像が一番有効であるといえる。映像は、その場に自分が居て、現場や対象を実際に見ているという錯覚を作り出すからである。

映像は、撮影ばかりでなく、それが再提示されるやり方を含めて、意図され選択され、したがって作られたものである。このことは、必ずしも映像は必然的に主観的なもので客観的ではありえないという意味ではない。主観的でも客観的でもない対象との関係そのものが映像というものであろう。しかし映像を見る者は、とにかくカメラの目（とその背後の撮影者の目）を自分の目であると錯覚することは確かである。そしてこのことは普通意識に上らない。したがって、これまでの活動記録の映像を提示することは、映像を使って活動の様子を知らせているだけではなく、実は密かにその活動の意味や価値についても提示していることになる。

これは学生を騙していることになるのであろうか。そう考える必要はないと思う。価値判断や特定の意味づけを含まない映像はありえないのであるから、記録映像の真正さは、意味づけの真正さを含めて問われるべきだからである。ところで記録の映像は、一般には鮮明で高画質なもののほど説得力が高くなる。撮影方法や技術のレベルに関係なく、デジタルカメラやビデオの性能の次元で説得力が高まるのなら、利用できれば優れた機器を用いたほうがよいといえる。

#### 4 二巡目のスタディ・スキルの授業

二巡目のスタディ・スキルズでは、これは初めての

試みであるが、実験的に、デジタルカメラによる撮影を学生にやらせてもらった。指示は、美術科周辺や大学内を歩きながら、「注意を引いたもの」「気になったもの」「美しいと思ったもの」「珍しいもの」「好きなもの」「発見したこと」などを、一人3枚以上撮影してくる、というものであった。使用機材は、KONICA MINOLTAのDiIMAGE A1という有効画素数が約500万画素で、焦点距離が7.2~50.8mm（35mmフィルム換算で28~200mm相当）のズームレンズがついたデジタルカメラ一台である。このカメラには手ぶれ補正機構が備えられていて、露出モードをプログラムオート、フォーカスモードをオートフォーカスにしておけば、通常の撮影であれば、初心者でも簡単に比較的高画質の失敗のない写真が撮れる。カメラが一台しかないので、グループで一緒に歩き回りながら、撮りたいものを見つけた人が撮影するというスタイルになった。今回は撮影に40分を当てたが、カメラが沢山あればもっと短い時間でも可能はずである。撮影が終って研究室に戻ってきてから、今取ったばかりのものを、プロジェクターを用いてホワイトボードに映像を投影し、鑑賞会を行なった。3~40枚の写真を一枚一枚見て行しながら、自分の撮った写真の解説をしてもらい、他の学生や教員が質問したり、面白いと思うところを出し合ったり、感じたことを話したりするという形の鑑賞会である。

この授業の目的は、写実習ということに重点が在るわけではない。重心は、教員と受講生一人一人のコミュニケーションと人間理解というところにある。写真の撮影という方法を使った訳は、美術科に入ってきた学生である以上、美術に関わりのある事柄を手段とした方が、お互いのことを理解し合うことに興味が湧くし、コミュニケーションし易いためである。しかし、それだけに止まらず、スタディ・スキルズに写真の実習を利用することにはいくつかのメリットがあるように思われる。これらを列挙してみる。

- 各学生がどんなもの（被写体）を見つけてくるかということは、教員にとっても、学生にとっても興味深い。
- 撮影した写真とそれについての説明を聞くことで、学生の美術に対する考え方や、関心の在りどころをある程度伺い知ることができる。
- 具体的な写真というものがあることで、写真についての会話をすることで、学生自身のことや考えなどについて直接聞く場面を、挿入することがし易くなる。
- 学生の写真についてコメントして行く中で、教員の美術観や、学生にこれから学んで行ってほしいことを、押し付けがましきでない自然な形で示すことができる。
- それぞれの写真の面白さや良いと思われる点に特に言及することによって、学生は自分が認められたと感じ、今後の大学での学習に対する自信と希望、や

る気を起こすことができる。

- 同じ場所での撮影と、その一つ一つの写真について、みんなで話し合うことを通して、様々なものの見方や考え方、興味関心の在り様があることが実感でき、その経験の楽しさからコミュニケーションの価値が理解される。

本稿の末尾に、学生が撮って来た写真で、面白かったものを数枚載せておくので、見て頂きたい。勿論、元の写真はカラーである。

## 5 おわりに

大学での学び方の方法や技術を学ぶことが目的とされるスタディ・スキルズで、はたしてこのような授業が適切であるといえるか、疑問を呈する向きもあると思われる。しかし、スタディ・スキルズという科目が必要とされるようになった理由は何かと考えてみれば、それは、勉強についていけなかったり、目的を見失い学ぶ意欲を喪失したり、教員や仲間と上手く接することができなかったりして、大学で学び続けていけない学生が増加してきていることへの対応である。そうすると、これは単に資料の調べ方やレポートの書き方などの個々の知識やスキルの不足の問題ではないのではないかと思えるのである。要は、これはコミュニケーションの問題ではないだろうか。絶対的な知力にはそれほど差があるとは思えないのであって、大学で学び続けていけない学生とは、教員や仲間と上手くやっ

ていけない学生のことであり、それはコミュニケーションが不足していたり、コミュニケーション能力に劣るためではないかと思われるのである。これらがあれば、資料の調べ方が分からなくても、聞いて教えてもらえばよいだけのことだからである。したがって、スタディ・スキルズを、個別化した個々のスキルの集積のように理解する必要は、必ずしもないと思われる。

それでは、話し方や聞き方、質問の仕方、答え方などのコミュニケーション技術を教えるのがよいのか。こうしたことについての知識や技法を身につけることも役に立つかもしれないが、もっと重要なのは、大学での生活において、教員や仲間とコミュニケーションを持つということである。その体験から、コミュニケーションの技術も学ばれるし、コミュニケーションの重要さや楽しさが解るからである。端的に言えば、大学への新入生は、早い時期に、教員や仲間とコミュニケーションを持つことが大切である。昔の学生の多くは自ら機会を作ったりしながら、熱心に人間関係を構築していったが、最近の学生には、自主的にはそれができない者も多くなっていると思われる。したがって、「スタディ・スキルズ」で、それを行なうべきだと考える。入学当初に教員や仲間との間で楽しいコミュニケーションの体験が持てれば、以後、関係やコミュニケーションを膨らませて行く事は、ずっと容易になるのではないだろうか。







